

大原幽学と性学門人集団

前夜組織の成立と展開

松丸明弘

OHARA Yugaku and Groups of Sei-gaku Disciples: the Formation and Development of the Zen'ya Organization

はじめに

- ① 漂泊の幽学と性学門人集団
- ② 「前夜」を中心とする門人集団の成立
- ③ 前夜組織の活動と幽学の行動
おわりに

【論文要旨】

大原幽学は、近世後期の東総地域において、「性学」と呼ばれる精神修養的实践と先祖株組合などの経済技術的実践の両面の実践で農村の改良運動を進めた人物である。幽学の性学仕法と呼ばれるこれらの実践は優れて効果ある実践として、農民間で評価され、多くの門人を獲得したが、幕府の嫌疑のかかる所となり、さらに牛渡村一件から始まる足かけ六年もの長期の裁判に及び、最後は、安政五（一八五八）年に自殺を遂げた。本稿は、この幽学について易や人相、あるいは和歌などで生活の糧を得ていた漂泊期から、幽学の説く性学が東総地域、特に長部村を中心に興隆し、最後には「改心楼」なる教導所を建設するに至るまでの時期の、特に幽学とその門人集団を明らかにし、彼らの作りだした組織について考察したものである。幽学の説く性学が、天保後期から僅か数年で六〇〇人以上の門人を獲得するまでに至ったのは、ただ単に幽学個人の活動だけで成しえたものと考えるには無理がある。また従来の幽学関係の

著作物に見られるような幽学の顕彰過程の中で、実践のすべてを幽学に帰するという方法論にも問題がある。やはり重責を担った長部村の遠藤良左衛門や諸徳寺村の菅谷又左衛門に代表される高弟たちの存在と彼らが中心となって作りだした「前夜」に代表される組織に目を向けていく必要がある。本稿では、東総一帯で幽学が活動をおこなう過程で、支配機構の枠組みを越えてつながり、活発に活動を展開する組織が、農民自らの手で生み出されたが、それはどのような組織であったかについて、その具体像を明らかにした。この組織が、幽学の活動を支え、教導所である「改心楼」を建設することになる。そして「改心楼」の設立から牛渡村一件に密接に関わっている点で、幽学の性学活動を考える上で重要である。また、成田市域の門人集団や信州の上田・小諸の門人集団、さらに幽学の江戸訴訟に登場する高松家との関連についても明らかにした。

はじめに

大原幽学。出自は不明^①。幽学の行動が最も詳細に記されている日記である「口まめ草^②」によれば、文政九（一八二六）年にはすでに漂泊の身となっている。幽学は、諸国を流浪しながら旅先で修得した易や人相、あるいは和歌などで生活の糧を得ていたものと考えられる。東総地方に活動の拠点を移す頃には諸国で得た知見をもとに、精神修養的实践と経済技術的实践の両面を持つ性学仕法と言われる独自の農村改良運動を始めるようになる。これらの実践は、天保期の疲弊した東総地域の村落において優れて効果ある実践として評価され、幽学門人の数は激増の一途を辿る^③。しかし、やがて幕府の嫌疑のかかる所となり、安政五（一八五八）年に自殺を遂げることとなった。

なぜ幽学の説く性学が天保期（一八三〇～四四）から東総地域に広がりを見せたのだろうか。この理由については、これをただ単に幽学だけの活動だけで成しえたものと考えるには無理がある。事実、幽学の生前より死後の方が門人数は増加している^④。従って、従来の幽学関係著作に見受けられる一般的な傾向として、すべての実践を幽学に帰するような人物伝的な歴史叙述では、幽学を通して東総地域の近世後期の歴史的状況を総体として捉えることは困難であろう。そこには幽学のみならず重責を担い活躍した高弟の存在と彼らが生み出した組織があったことが予想され、それらの活動全般にも眼を向けていく必要がある。この時期の性学隆盛の背景に、村落支配機構の枠組みを越えて、農民自らが作り出した組織があり、結果的には、それが体制からの嫌疑を生み、幽学の検挙、さらに江戸訴訟、そして最後は幽学の自殺へとつながっていく点で重要である。本稿では、特に「前夜」といわれる組織、幽学とその高弟たちを中心とした組織の存在に焦点をあてて、組織の概要、成立、活動、

他の組織との関係などについて明らかにしたい。

大原幽学については事績の紹介から実証的な地方史研究まで多くの著作が世に生み出されてきている^⑤。特に先祖株組合に代表される幽学の数々の実践は性学仕法という名でとりまとめられ研究対象とされてきた。「前夜」と呼ばれた組織についても同様で、初期には幽学の实践の一部として羅列的・個別的に紹介・研究されてきたものである^⑥。

近年では地方史的な立場から、堀江俊次氏が幽学死後の組織的展開について神文を中心とした分析をしている^⑦。また藤田昭造氏が幽学生前から死後の「前夜」組織の拡大変化を含めて研究をおこなっている^⑧。

本稿で取り上げる組織の問題もこうした有益な先行研究の成果を踏まえて、性学仕法の一部ということで個別に検討がなされてきた性学組織というものを、幽学の房総での活動全体を見据えながら、主要門人の性学運動の展開とともに考察していこうとするものである。

また幽学の活動を考える上で、幽学が長部村を拠点として後世にその名を残すような活動をする以前は、日本各地を転々と流浪していたことを視野に入れておくべきである。土地に生活基盤を持つ農民が大多数を占めていた近世において、幽学のような存在は稀であり、その実態についてはあまり知られていなかったのではないだろうか。そのような漂泊民ともいべき幽学が、やがて東総の地域を拠点として活動していくようになる過程を教団組織の成立を追いながら明らかにする。アウトサイダーである幽学が、情報または「知」の伝達者として、この東総地域で始めた彼の「仕法」が実り始めるその過程を幽学と彼を支えた主要な門人集団を含めて捉え直す必要があると考える。

① 漂泊の幽学と性学門人集団

幽学は房総地域にはいった当初は、易や人相を見たり、そしてやがて

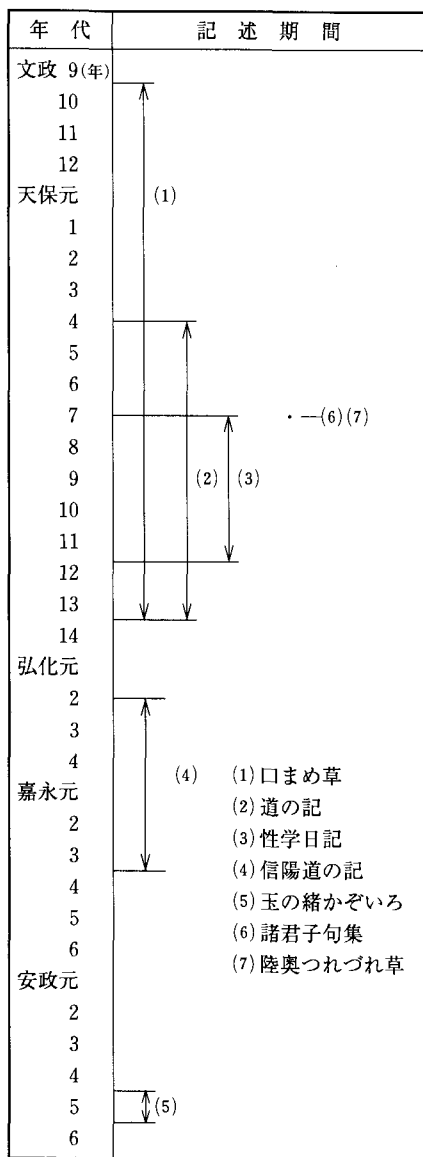


図1 日記類の記述期間
(典拠『大原幽学全集』)

性学として結実する自らの教説を説くなどしながら各地を漂泊する生活を続けている。土地という生産基盤を持たない幽学は、どのような方法で糊口を凌いでいたのか。幽学自身は、東総地域の出身ではないこともすでに明らかされている⁽⁹⁾。幽学は、東総地域で最初から長部村を拠点として活動していたわけではないのである。

幽学が初めて房総の地を踏むのは、天保二(一八三一)年十一月十八日である。

「口まめ草」には、

未の刻浦賀に着船、紺屋に宿る。僕はより上方に登るべき旨を語れば、主曰く、此海三りの渡を越て鋸山といへる銘山あり、行きて一覽すべしと。強いて勤めるに任せ、その世湊の沙汰すれば、明早朝便船ありといふ。明る十八日早朝便船に乗り、巳の上刻百子村に着きぬ。湊屋に休み、金谷村を打過ぎ、保田村に行く。……(後略)⁽¹⁰⁾

とあり、幽学の房総漂泊は浦賀から船に乗り、百子村に着く所から始まる。それ以降の行動については、幽学の書き残した日記によって知ることが出来る。日記の記述期間を示したものが図1である。

図1に見られるように幽学は文政九(一八二六)年から安政五(一八五八)年まで日記を記しており、天保二(一八三一)年以降の行動について幽学が記した日記には、「口まめ草」、「道の記」、「性学日記」、「諸君子句集」、「陸奥つれづれ草」、「信陽道の記」、「玉の緒かざいろ」がある。それぞれが『大原幽学全集』⁽¹²⁾に掲載されている。「諸君子句集」は天保七(一八三六)年二月一日から二月八日まで、幽学が性学門人を連れ立って磐城国平宿まで、「陸奥つれづれ草」は「諸君子句集」の後を受けて三月四日に松澤村に帰着するまでを記した一連の旅日記である。

「信陽道の記」は、弘化二(一八四五)年から嘉永三(一八五〇)年までの信州への旅日記、「玉の緒かざいろ」は、安政四(一八五七)年より安政五(一八五八)年までの江戸での滞在日記である。従って本稿で東総での生前の幽学の活動を知る手がかりとなるのは「口まめ草」、「道の記」、「性学日記」ということになる。

この三点の日記について、まず「性学日記」の記述は、「道の記」の同期間の部分の記述と同内容になっている。つまり「道の記」の天保七(一八三六)年から天保十一(一八四〇)年の部分が「性学日記」という名称で重複して『大原幽学全集』に掲載されていることになる。また

『大原幽学全集』所収のこの三点の日記を原文書と比較検討された松澤和彦氏は、「口まめ草」は幽学が自分の日記をもとにして後日に編集し直したのではないかと述べている。¹³⁾

『大原幽学全集』掲載の「道の記」は、原文書からは三冊の日記をつなぎあわせて編集されている。まず、目録表題には「天保四年より七年までの錦江堂日記」とある日記があり、記述期間が天保四（一八三三）年一月一日から天保七（一八三六）年一月十七日までの三年間で、この日記には「道の記」と表紙に書かれてある。続いて目録表題に「初テ六人連奥州行日記其他御日記」とある日記があり、記述期間が天保七（一八三六）年一月二十九日から三月三日までのもので、これは別編として『大原幽学全集』に「諸君子句集」と「陸奥つれづれ草」に二編に分けて掲載されている。続いて目録の表題に「天保六年三月より十一年までの御日記」とある日記があり、この日記の記述期間は天保七（一八三六）年三月四日より天保十一（一八四〇）年十二月末までの日記となっている。この日記には幽学は表題をつけていない。そして目録表題に「天保十二年御日記、天保十三年正月十六日より奥州行十八人」とある日記があり、この日記の記述期間は、天保十二（一八四一）年一月一日より天保十三（一八四二）年七月九日である。幽学は表紙に「種々日記」と題している。

以上、「初テ六人連奥州行日記其他御日記」を除いた「天保四年より七年までの錦江堂日記」、「天保六年三月より十一年までの御日記」、「天保十二年御日記、天保十三年正月十六日より奥州行十八人」の三点の日記をつないだものが、図1の②の「道の記」となる。「初テ六人連奥州行日記其他御日記」を含めて原典の四点すべての日記を合わせると、記述期間が天保四（一八三三）年一月一日から天保十三（一八四二）年七月九日まですべてつながる事になる。

したがって「道の記」と表紙にあるのは最初の日保七（一八三六）年

までの日記であって、この『大原幽学全集』所収の日記である「道の記」とは記述期間が異なる。つまり、後に作爲的にまとめられ、これを性学の道ともいうべきか「道の記」としたことがわかる。また原典のそれぞれの日記は、原文書自体が冊子であったものを、綴じ代の部分と袋綴じの折り返し部分を裁断し、卷子本にしている。従って現存する原典自体が既に加工された状態である。製本時の不整合なども指摘されている。¹⁴⁾ 本稿では、松澤氏の研究成果を踏まえて『幽学全集』所収の「道の記」と原文書とを照合しながら用いることとした。

さて幽学が房総の地に足を踏み入れてからどのような漂泊をしていたのか。日記からみる具体的な記述内容については、中井信彦『大原幽学』や木村礎編『大原幽学とその周辺』が詳しい。本稿ではこれら先行研究を踏まえながら、幽学の漂泊を東総地域とその周辺にわたり全体像を捉えることに力点を置きながらその活動について考察を加えたいと考える。そして、その後の性学組織との関連を考えていきたい。

まず天保二（一八三一）年から天保十三（一八四二）年まで一年ごとの滞在村を調べ、幽学の足跡を辿ったものが表1である。¹⁵⁾

幽学は日ごとに確実に日記をつけてきたわけではない。数日、時には一か月をまとめて書いていたことが原典の「道の記」における墨色や書風の様子から伺える。年ごとに日記の記述量も大きく変化している。表に記載されている事以外にも多くが隠されているものと考えるべきである。幽学が毎日丹念に日記をつけていたとは考えにくいいため、全体をみるにより大きく活動的地域的特徴を見る必要がある。

房総の地に足を踏み入れた天保二（一八三一）年の頃は、幽学は東総地域にほとんど足を踏み入れていない。内房から館山周辺を中心に江戸へ戻りつつ、漂泊を続けている。それが「道の記」を書き始めた天保四（一八三三）年には四三か所、天保五（一八三四）年に入り九四か所と、この頃から本格的に東総地域一帯に足を伸ばしている。日記は天保十三

表1 天保2年から13年までの幽学の訪問村一覧

	天保2	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	合 計
磯ヶ谷						1	1						2
松崎		1				3	1	4	1				10
真里谷		1				2	5	1					9
久留里	1	4											5
一宮	1	4	4	2	2	7	8	4	2				34
東金		2	1	2		1	1		1				8
植谷							3						3
屋形		1	5	1			17	1	4				29
殿部田			5	12	9	4							30
飯倉				1	8	7	3						19
飯高			2										2
八日市場		3	13	16	12	3							47
籾木				11	8	1	1						21
松崎					1	4							5
長部					2	1	3	11	6	18	12	3	56
諸徳寺				2	7	3	3	13	17	22	6	3	76
松澤				2	14	4	1	8	5	1			35
桜井				1					2	4			7
布野										2			2
萬歳				7	2								9
府馬										2			2
小川						1	3	2					6
岡飯田										1			1
小見川				1	1	2	4	3	6	11	2		30
野田							3	1	2	1			7
北小川					1								1
宮原				3									3
阿玉川												1	1
小南					1								1
足川									1				1
十日市場									1	1	1		3
足洗		1	1	9	7								18
銚子		1	2	6	2								11
佐原			1					3	8	6	3	2	23
助澤				4									4
南城					6	2							8
汲上		2	1										3
鹿嶋		1	2						1				4
香取				1									1
潮来			2										2
神崎			1	1									2
並木				5									5
名木				1	2								3
成田			2	1	1			1	1				6
磯部					4	2	1	2	3				12
荒海					5	2	2	5	8	4	7	4	37
長沼			1	5	8	4	2	5	5				30
竜角寺						1			1				2
幡谷							1	2	5			1	9
合 計	2	21	43	94	103	55	63	66	80	73	31	14	645

出典 「道の記」(『大原幽学全集』)と大原幽学記念館所蔵の「道の記」原典の日記類)。「口まめ草」(天保2～3年の部分) (『大原幽学全集』)。

註) 空欄は数値が0である。東総地域とその周辺の村落を中心にまとめている。

(一八四二)年の一月より東北方面を旅行し、長部に帰着した七月九日に終わっている。天保十三(一八四二)年は半年分ということになる。訪問村の数は少ない。

天保二(一八三一)年から天保十三(一八四二)年までの間に東総地域とその周辺に確認できるだけでも約五〇か村を訪問している。天保二(一八三一)年から年を追うごとに東総地域に足を踏み入れることが多くなっていく。そして天保五(一八三四)年頃から

①長部村や諸徳寺村を中心とする地域

②磯部村や荒海村を中心とする地域

の二つに大きな拠点が形成されていくことがわかる。そして天保十一(一八四〇)年以降は、東総が活動の主要舞台となり、①と②の二つの地域以外に佐原と小見川が加わってくる¹⁶⁾。

全体を通して、定住にはほど遠く絶え間なく移動しながら漂泊の生活をする幽学を見ることが出来る。東総地域では天保八(一八三七)年では一年間に六三回、天保九(一八三八)年では六六回と滞在場所を移動している。また頻繁に訪問しているのは、諸徳寺村で七六回、次に長部村の五六回、続いて長沼村の三七回とその後の性学活動において重要な役割を担う門人の村々である。

また幽学の行動パターンの特徴も伺える。まず拠点となる村が房総諸地域に点在しており、その拠点となる村から近隣の村へ足を伸ばしては、また元の拠点の村へ戻るといったパターンで、しばらく拠点となる村の周辺の村を周遊しながら、ある時期に大きく次の拠点となる村に移動し、またその地で周辺の村を周遊するという行動をとっている。拠点となる村は、おそらく延べ十数回にのぼる滞在回数を持つ村と考えられる。表1では松崎村、一宮村、屋形村、殿部田村、八日市場村と表中に順々に見いだすことができる。これら各村ごとに滞在先は同じ知人宅である。それは、神職者や陰陽師のような宗教者や僧侶、長沼村の本多元俊のよ

うな医者、そして村々の上層農であり、幽学はこのような村における富裕であり、知識や教養のある階層に位置する人々のもとに漂泊の文人として一宿を求めたものと考えられる。表1に見られるように長く逗留することのないことが多くの滞在村の存在につながっている。

また幽学は神文と称する一筆を発行している。神文は幽学とその門人との関係を示す入門許可状のようなものである。門人として守るべきことを神に誓う形式で発行されている。幽学は人相、易術、神宝秘事、祈禱法、そして性学と内容の異なる神文を発行している。性学に關したもので「道友加入」「同門加入」など多少文言が異なっている。おそらく各地を漂泊していた幽学にとっては、神文は幾許かの路銀を手に入れるための手段であったはずであろう。この神文の内容によって、幽学が東総において何をもちて生活の糧としていたかを知ることが出来る。幽学が生前に発行した神文については、過去『旭市史』で分析が行われており、今回はそれ以後、新しく見つかった神文を含めての六一八通について新たに作り直したものが、表2である。表1と比較検討しながら幽学の活動を探ることにする。

幽学が房総地方で活動を始めた天保二(一八三一)年から天保三(一八三二)年までの神文に、性学についてのものはない。この段階では明らかに人相や易などが生計の主たる手段であったと考えられる。幽学が性学についての神文を出しはじめるのは天保四(一八三三)年で、五通である。しかし、この時期でも全体の二五通の神文のうちの五分の一ではない。これら五通の性学神文はすべて長沼村の門人に対してのものである。それから天保五(一八三四)年に一〇通、天保六(一八三五)年には二三通となる。表1と対比すると、天保五年は年間九四か所、天保六年は年間一〇三か所と幽学が積極的に東総の地を漂泊していた時期と一致する。これ以降、性学の神文が増え始め、天保九(一八三八)年以降はすべてが性学の神文となっている。したがって性学は、はじめ荒

表2 幽学生前の神文内容・年代別一覧

神文内容	文政		天保		弘化		嘉永		安政		不明	合計																					
	1	11	1	2	1	2	1	2	2	3																							
易術・秘事・易伝	3	5	4									39																					
神宝・秘事・十種		1										1																					
祈禱法		1	4									5																					
人相・観相			1	1	3	19	58	32	5	8		127																					
家名相統							3					3																					
性学同門 性学道友						5	10	23	31	35	89	47	7	21	4	10	18	16	15	17	8	11	25	14	7	8	5	7	5	4	1	443	
合計	3	7	8	1	1	5	25	69	74	41	45	89	47	7	21	4	10	18	16	15	17	8	11	25	14	7	8	5	7	5	4	1	618

出典 干潟町教育委員会編「大原幽学関係資料調査報告書」(平成2年)
 註) 空欄は数値が0である。

表3 天保7年における幽学門人集団

集団名	人数	補足
足洗村	8	筆頭は千本松陸奥
松澤組	39	筆頭は宇井出羽守、遠藤良左衛門はこの集団に属していた
小見川連	19	筆頭は高木彦兵衛
長沼村組	23	筆頭は本多元俊
殿部多村	2	南陽道人、藤田桂助
飯倉村	1	椎名璇蔵
合計	92	

出典 「連中誓約の事」(天保7年 大原幽学記念館所蔵文書)

まず足洗村が八名、この筆頭は千本松陸奥(神主)とある。次に三九名の署名がある「松澤組」である。筆頭には宇井出羽守(神主)である。この中には遠藤良左衛門の名もある。次に「小見川連」という名で一九名、この筆頭は高木彦兵衛である。次に「長沼村組」として二三名、筆頭は本多元俊(医者)である。次に殿部多村で二名、南陽道人(陰陽師)と藤田桂助である。この南陽道人はこの連名誓約の連名部分では、一番最初に書かれており、連名誓約の発起人的な役割を果たしている。そして最後に飯倉村の椎名璇蔵の名前がある。以上、この「連中誓約の事」から天保七(一八三六)年の時点では、九二名もの門人を獲得し活動を展開していることがわかる。後に見られるような遠藤良左衛門を中心とする組

海村や長沼村周辺で受け入れられ、やがて長部村や諸徳寺村を中心とする地域で、かなり積極的に受け入れられたものであると考えられる。次に幽学がこの性学と称するものを説き始めるようになった初期の段階で地域の村々でどのような組織集団が形成されてきたのかについて、これを明らかにすることは困難ではあるが、ある程度まとまった人物集団が出現している史料に若干の手がかりがある。それは「連中誓約の事」という史料で「大原幽学全集」にも掲載されている。『大原幽学全集』解説には、幽学が天保七(一八三六)年八月二十二日に、後事を託して訣別し、翌日上方へ出発したので、道友は深く、これを惜しみ、九二名が連署を以て誓約し、幽学の永住を願い求めたものと説明されている。それが文書の前半部分、そして後半部分には幽学が道友たちの連名誓約とそれに対して添えた奥書が付いている。「連中誓約之事」より作成した表3より、この連名誓約に出てくる九二名は、天保七(一八三六)年十月の時点である程度まとまった集団になつていくことがわかる。集団は六組のグループに分かれている。

織は六つのグループのひとつでしかなかったことがわかる。

また天保六(一八三五)年から七年にかけての二年間の幽学の足跡について、天保六年は、ほぼ下総国を出ることはないことが日記より判明する。一年間を房総地域で過ごし、松澤村には一四回、飯倉村には八回、長沼村には八回というように滞在する村が限られている。しかもそれは前述の「連中誓約の事」において署名している九二名の門人を分けたグループとほぼ一致している。そして天保七(一八三六)年の後半部分は八月に上方行きのために仲間に別れを告げたということになっているが、実際には船橋を経由して江戸へ向かっている。上方には行かなかったのである。

②「前夜」を中心とする門人集団の成立

幽学の自筆の日記である「口まめ草」によると天保六(一八三五)年八月三日に

長部村名主より性学講演を申し来る⁽²⁴⁾

と記されており、おそらく初めて長部村の地を訪れたのは、この天保六(一八三五)年八月三日であることがわかる。その後何回か逗留した後、天保八(一八三七)年の九月に長部村の遠藤良左衛門家に迎え入れられている。そして以後はこの遠藤家と密接な関係を持ち、ここを拠点として活動を展開するようになる。それは、天保九(一八三八)年九月に先祖株組合が結成されていること⁽²⁵⁾。また天保十三(一八四二)年九月には幽学の草庵が遠藤家の敷地内に作られたことからわかる⁽²⁶⁾。こうして幽学が遠藤家に迎え入れられる形で長部村を拠点として活動するようになる。その意味で天保八(一八三七)年が、東総地域において長部村が性学の中心となっていく大きな転換点であると考えられる。つまりそれまでは幽学が周遊しながら東総地域の各拠点に出向いていくという形式から、長

部村に幽学を求めて門人が集まるという形式に変化し始めるからである。そしてその中で作られていった組織に「前夜」と呼ばれた組織がある。この組織について、後の幽学在世期における性学活動の中心的な役割を果たすことになるが、その組織はどのような構成員からなっていたのであろうか。この点について、遠藤家文書の「定」⁽²⁷⁾と菅谷家文書の「前夜練替改」⁽²⁸⁾の両文書より明らかになった構成員を一覧にしたものが表4である。○印が出席を許可されて名前が記載されているものである。また補足事項には各人のデイトールを簡単に記した。

これら両文書の作成時期については記されていないが、両方の文書に登場する人物としてこの中に遠藤良左衛門の父親にあたる伊兵衛がいる。この伊兵衛は安政三(一八五六)年一月十一日に死去している。幽学が切腹したのが安政五(一八六四)年であることから、両文書とも幽学在世中のものと判断できる。また「改」の方には辰の六月十六日とあり、安政三年一月に伊兵衛が死去していること。天保三(一八三二)年には、まだ長部村での性学が始まっていないことから、「改」は、天保十五(一八四四)年の作成と判断できる。そして両文書の終わりには「右名前之外前夜出席一切無用也」と記されている。木村礎氏は二代目の指導者というべき遠藤良左衛門と幽学の性学の異質性を早くから指摘している。特に遠藤良左衛門時代の末期には「密室的宗教性」を帯びていると⁽²⁹⁾している。その意味で密室的部分の端緒が、すでにこの前夜組織にも現れている。

全体としてまず、表4に書かれてある人物名は、家を表記してあるのではなく、あくまで個人を意識して記してあるのが特徴である。例えば遠藤家では伊兵衛と孫の良助の二名が個人として掲載されている。林伊兵衛も子供の金之助と両名が記されていることなどから、この文書は家ではなくあくまで個人を対象としているものであることがわかる。しかもかなり年齢的にも若い者が加わっていることが、幼名が多く記載され

ていることから判断できる。

またこの前夜組織の構成員には女性の名前は一人もない。これまで幽学の性学において女性の果たした役割について強調して書かれた論考³⁰もあるが、この前夜組織に関するかぎり、女性は参加してはいないのである。天保十五（一八四四）年以降の主要メンバーが集まるこの前夜組織に女性が一人も参加していない事実、改めて女性というものを幽学の性学の全体像の中から位置づけることが必要であることを物語っている。幽学は男性と女性、大人と子供を分けてそれぞれが家において果たす役割を重要視してきた面があり、それぞれに独自の仕法をおこなっている。女性のみを捉えれば、近世農村社会でクローズアップできるような史料に出会うことができるが、全体の中からその相対的位置を考えるに、女性には良妻賢母主義の枠組みを逸脱するものではないことがわかる。やはり、個人、個人を門人として把握していく方向性が、相対的に女性や子供を浮かび上がらせていくという結果となったのではないだろうか。

さらに大原幽学はこの両文書には記載されていない³¹。幽学の遺した「道の記」にも「前夜」という言葉は出てこない。

同様にして二代目教主となる遠藤良左衛門の名前もない。というより、この前夜組織の成立の中心人物がまさに遠藤良左衛門である可能性も高い。最重要人物である大原幽学と遠藤良左衛門の名前はこの二点の文書には掲載されていないのである。すでに別格の存在になっていたものと考え、この時期にはすでに遠藤良左衛門は幽学に並び、この組織の成立に深く関与していたものと考えられる。

次に表4中のAからDのそれぞれのグループの概要と特に主要な門人について見ていきたい。この教団組織は、数か村にもまたがる村々の門人で構成されており、支配機構の枠組みを越えた組織的結合となっているのが特徴である³²。その意味では東総地域一帯の荒廃状況の中の村落共同体の再建を旨として作られた組織ということだけでは事は済まない

はずである。

また表4の各人物の特定については、少なからず同名のものが近隣諸村に多く存在していること、各家ごとに世代交代で同名を用いている場合が多いこと、幼名である場合もあり、年齢ごとに改名していることなどの理由からこの集団一覧にあるすべての門人についての正確な把握は困難であるが、他の幽学関係文書を通じた性学門人の活動からある程度確定することは可能である³³。

Aグループは、「前夜出席勝手次第」と書かれており、俗に長老格の人物と思われる。以前には指導力を発揮していた者たちであるが、現在は年齢的あるいは病気等で会合には積極的に参加することはないような人物集団と考えられる。「定」も「改」も同じメンバーが記されている。遠藤伊兵衛、貞助、林伊兵衛の三名である。

番号1の遠藤伊兵衛は長部村名主で、その子が二代目の教主となる遠藤良左衛門である。伊兵衛は、安永八（一七七九）年の生まれで、安政三（一八五六）年一月に死去している³⁴。従って天保十五（一八四四）年当時で六〇歳である。

2の貞助は誰なのか。貞助と名のある人物として、木村礎氏は高木貞助という人物を「門人群像」の中で紹介している³⁵。文化四（一八一七）一八〇八）年頃の生まれで長部村の百姓。性質は短気・我儘・癩性、些細なことで急に腹を立て、人に刃物を投げつけるような自制心の欠けた人物であったが、幽学と良左衛門の熱心な指導で改心し、以後、農業に丹精し、諸方より子弟を預り、教導し、多くの者が改心することになった。後に醜い病に侵され、顔面が膿ただれて、人に会うことも憚られるようになったので、従来は改心楼下に住んでいたのが転居したとして紹介している。「景物集」にも嘉永五（一八五二）年八月二十九日に

貴様事、長々病氣身分に而、當年耕村内に秀而被致出精、於予は悦

不遇之候。依而爲褒美と進之者也。⁽³⁶⁾

と表彰されており、ここには「高木貞助殿」とある。また性学神文を安政七（一八六〇）年十一月に入れており、「長部村高木貞助殿」としてある。⁽³⁷⁾この貞助という人物名は、「仕事割控」⁽³⁸⁾という史料にも出てくる。この史料は大原幽学が計画的農業指導をおこなうために作成したものであるが、この中に家内人数として「父親・母親・本蔵・貞助・与三郎・正吉・え川・きよ・つね・こう」とあり、本蔵は遠藤良左衛門のことであり、次に書かれてある貞助というのがこの人物なのか。しかしここに書かれているのは遠藤家の労働力把握としての名前であり、家族を記したのではない可能性もある。長部村には宗門人別帳が現存していない。良左衛門の弟とも考えられるが、弟であれば遠藤貞助とされるべきところが「改」には長部貞助と記載されている。嘉永四（一八五二）年の長部村の名寄帳にも貞助という名前は⁽³⁹⁾ない。遠藤家の小作人とも考えられるが、他の二人である遠藤伊兵衛と林伊兵衛の社会的立場からするとAグループに列挙されていることが不思議である。木村氏の言う高木貞助だとすれば、前述の病気との関連でこのグループに位置づけられたのかも知れない。高木貞助であるとするならば、三七〜三八歳前後の年齢である。

3の林伊兵衛は幽学をはじめとする長部村の性学道友の中ではパトリオンのな存在で、寛政六（一七九四）年生まれ、明治三（一八七〇）年七十七歳で死去。海上郡十日市場村で近隣四か村の割元名主を勤めた村内最有力の地主である。伊兵衛の子が正太郎で、この子が幼いために諸徳寺の菅谷幸左衛門が娘婿として迎えられている。幸左衛門が性学を二人に勧めたことがきっかけで長部村の改革には多額の資金を融通している人物である。つまり、伊兵衛は天保十二（一八四一）年に父又左衛門の死去後、諸徳寺村に妻子を連れてもどるまでの間、菅谷幸左衛門の義父であったということになる。当時五一歳である。

Bグループは、小前夜、中前夜、大前夜に出席できる者。小前夜、中前夜、大前夜それぞれについて名前が組み込まれている。このBグループが、その構成員たちのその後の活動から見ると、実質的にもっとも精力的に活動していた上級幹部集団と考えられる。

まず4の小前夜筆頭に書かれている左源司という人物については、天保十四（一八四三）年に林伊兵衛から金三〇両を新たな教導所である改心楼設立のために借り受けたとする借金証文に「長部村良左衛門、諸徳寺村又左衛門、桜井村左源司」とある。⁽⁴⁰⁾神文についても天保九（一八三八）年九月十九日に性学同門として「桜井村左源司」とある。⁽⁴¹⁾この桜井村の左源司についてはその後の門人の活動には全く登場しなくなる人物である。それは桜井村の幽学生前門人が三〇人であったのが、その死後の入門者が七人になってしまっていることと関係があるのではないだろうか。⁽⁴²⁾

5は諸徳寺村の菅谷又左衛門である。菅谷又左衛門は遠藤良左衛門の次に位置するほどの高弟の一人である。諱は政興と言ひ、文化十四（一八一七）年生まれ、元治元（一八六四）年十二月二十一日、四八歳で死去している。⁽⁴³⁾又左衛門は菅谷家の世襲名である。名主・組頭を勤めた上層農であり、先祖株組合などの経済的な性学仕法の金融面を担当した。この菅谷家が林家や岩井家とも姻戚関係にあったことが、両家の性学加入に大きな役割を果たし、同時にそれが資金面で多大な貢献となって現れていることを考えると、又左衛門は教団組織の経済的な支援者として欠くべからざる存在であったといえる。

6の幸左衛門は菅谷又左衛門の実弟である。文政四（一八二二）年生まれ、明治三十五（一九〇二）年十二月二十日に八二歳で死去している。天保九（一八三八）年十八歳の時に、海上郡十日市場村の林伊兵衛家の婿となっている。これは伊兵衛が病気がちであり、子の正太郎が幼かったということの後見ということと迎えられ、娘すわの婿となった。天保

表4 前夜組織構成員一覧表

	番	名 前	定			改			補足事項 (居住村、天保15年時の年齢など)
			小	中	大	小	中	大	
A	1	遠藤伊兵衛	○	○	○	○	○	○	長部村、60歳、遠藤良左衛門父、安政3年死去
	2	貞助	○	○	○	○	○	○	長部村、高木貞助
	3	林伊兵衛	○	○	○	○	○	○	十日市場村、51歳、金之助父、幸左衛門義父
B	4	左源司	○	○	○	○	○	○	桜井村、大木左源次
	5	又左衛門	○	○	○	○	○	○	諸徳寺村、菅谷又左衛門、28歳、幸左衛門兄
	6	幸左衛門	○	○	○	○	○	○	諸徳寺村、菅谷幸左衛門、24歳、又左衛門弟
	7	良助				○	○	○	長部村、遠藤良祐、遠藤良左衛門実子、15歳
	8	松次郎				○	○	○	諸徳寺村、菅谷七郎衛門実子、文太郎、15歳
	9	金次郎				○	○	○	足川村、後の足川村網主の岩井重右衛門、20歳
	10	金之助				○	○	○	十日市場村、林正太郎、林伊兵衛実子、15歳
C	11	佐重		○	○		○	○	入野村、石毛佐左衛門、43歳
	12	正之進		○	○				桜井村
	13	文左衛門		○	○		○	○	府馬村
	14	吉兵衛		○	○				長部村、高木吉兵衛、32歳
	15	庄八		○	○				長部村、遠藤庄七、長部村、24歳
	16	利助		○	○				大角村、林利助
	17	奎之進					○	○	
	18	良蔵		○			○		長部村、高木良蔵、29歳
	19	源左衛門		○			○		長部村、高木源左衛門、37歳
	20	栄蔵		○			○		十日市場村、伊藤栄蔵、19歳
	21	太平		○			○		桜井村、治兵衛子
	22	弥三郎		○			○		桜井村、細谷弥三郎、19歳
	23	太三郎		○			○		長部村、太左衛門子
	24	直吉		○				○	桜井村、石井直吉
	25	権之丞		○	○		○	○	稲荷入村
	26	治太郎		○			○		鑄木村、実川治太郎、16歳
	27	常次		○			○		
28	富蔵		○			○		小川村、亘富蔵、21歳	
29	桂助		○			○		府馬村	
30	幸蔵					○		岡飯田	
D	31	桜井村より1人			○			○	
	32	七郎右衛門			○			○	府馬村、菅谷七郎衛門、42歳
	33	傳蔵			○				米込村、杉崎伝蔵、36歳
	34	利平			○			○	小貝野村、椎名利平
	35	野田小川より1人			○			○	
	36	治郎右衛門			○			○	岡飯田村、宮崎治郎衛門
	37	和平			○			○	府馬村、岡田和平
	38	伊左衛門			○			○	十日市場村、伊藤伊左衛門
	39	源助			○			○	府馬村、菅谷源助
	40	五助						○	十日市場村、林五助、19歳
	41	治郎左衛門			○			○	長部村、高木治郎左衛門
	42	治兵衛			○			○	長部村、高木治兵衛
	43	喜兵衛			○			○	布野村、小川喜兵衛
	44	市左衛門			○			○	米野井村、成毛市左衛門
	45	武助			○			○	米込村、杉崎武助
	46	高部村より1人			○			○	
	47	米込村より1人						○	

出典 「定」…『定』（遠藤家文書年不詳）、「改」…『前夜繰替改写』（菅谷家文書 辰6月16日）

註）補足事項の内容については、「神文及び道友録」（『大原幽学全集』）、「山田町史」、「突合姓名帳」（大原幽学記念館所蔵文書）、「大原幽学関係史料」（『旭市史』）、「元服人名録」（天保14年 大原幽学記念館所蔵文書）、「門人群像」（木村礎編『大原幽学とその周辺』）、「宗門人別改帳」（菅谷家文書 安政3年）、「幽学一件に勤めた者の名簿」（大原幽学記念館所蔵文書 明治元年）、「義論集」（大原幽学記念館所蔵文書）などの史料を利用した。年齢については天保15（1844）年当時の年齢として計算している。

十二(一八四二)年に父親の又左衛門が死去したことにより妻子を連れて諸徳寺村に戻っている⁽⁴⁴⁾。従って、林伊兵衛とは義理の父子関係にあったことになる。この関係で、金融面での援助を仰ぐことになる。以上、三名に関しては遠藤家文書「定」にも菅谷家文書「改」にも登場している人物であり、今後の性学活動に多大な貢献をした人物であることは言うまでもない。さらに「改」の方には四名の名前が記されている。

7の良助は、良祐あるいは良輔とも表記されることがあるが、長部村遠藤良左衛門の実子である。性学神文を弘化三(一八四六)年十二月十五日に入れている⁽⁴⁵⁾。遠藤家では、良左衛門の名前はなく、父の伊兵衛と子の良助の名前が記されている。

8の松次郎についてもこれも幼名である。松次郎は天保十五(一八四四)年に性学による元服儀式によって名前を改め「松次郎事 諸徳寺村文太郎⁽⁴⁶⁾」と改名している。神文には、性学神文として「菅谷文太郎」の名前がある⁽⁴⁷⁾。さらに「幽学門人名前取調帳⁽⁴⁸⁾」には「百姓当主七郎右衛門伴文太郎」とある。よって諸徳寺村の百姓七郎右衛門の子であることがわかる。また菅谷という名から菅谷又左衛門家との姻戚関係も推測される。

9の金次郎とは岩井金次郎のことである。文政八(一八二五)年生まれ、明治十八(一八八五)年三月五日、六〇歳で死去している。「岩井代官」と言われた足川村の大綱主であり、代々名主を勤めた岩井重兵衛の子である。次に孝之助、市右衛門などと改名し、最終的には重右衛門という名前になった。金次郎の父の重兵衛が三〇歳の若さで病死し、生後四か月で父を失った金次郎は、伯父や祖父父母によって育てられたが、特に母方の祖父にあたるのが諸徳寺村の菅谷又左衛門であった。つまり金次郎の母は諸徳寺村菅谷又左衛門家の出身であるということになる。

足川村では幽学生前には金次郎一人だけが性学門人であったことは、外祖父の菅谷又左衛門の極めて強い影響があったと考えるべきである。また幽学死後、足川村における九四名の入門者があったが、これは岩井家

の力によるものと考えられる⁽⁴⁹⁾。

10の金之助とは十日市場の伊兵衛の子である。やがて正太郎と名前を変えている。文政十三(一八三〇)年生まれ、明治二十九(一八九六)年十一月五日、六七歳で死去している。林伊兵衛家は伊兵衛が病弱であり、金之助が幼少ということで菅谷家から又左衛門の実弟の幸左衛門が婿にはいった関係で金之助も性学門人となったものと考えられる。

以上の4から10までのBグループの各員が小前夜、中前夜、大前夜に出席できるという集団で、後の改心楼建設から牛渡村一件までの一連の活動の中心的役割を果たしたいわゆる幹部集団である⁽⁵⁰⁾。年齢不詳の左源司を除き、遠藤家、菅谷家とその血縁関係者で構成されている。Bグループは地縁ではなくほぼ血縁で構成されているのが特徴である。

このメンバーについては、関東取締出役から疑惑をいだかせることとなる性学の会合所である「改心楼」の建設について、「改心楼普請人用控⁽⁵¹⁾」に改心楼建設にあたっての費用負担の内訳が書かれており、それをまとめたものが表5である。この中の費用負担の主要構成員と前夜組織の主要構成員を比較してみると、合計一一〇両のうち、前夜の特にBグループに所属すると遠藤良左衛門を加えて八〇両を捻出していることがわかる。中でも伊兵衛、又左衛門、金次郎と菅谷家で姻戚関係にあるグループで六〇両と半分以上を立替えている。特に良左衛門と同様の二〇両を立替えている又左衛門は改心楼建設になくはない存在であったといえる。

また性学門人集団の核となるこのグループの天保十五(一八四四)年当時の年齢を推定してみると、実に若い集団であることが判明した。又左衛門は当時二八歳、幸左衛門は二四歳、良助は一五歳、松次郎一五歳、金次郎二〇歳、金之助一五歳である。左源司は年齢不詳ではあるが、前述の借金証文に「長部村良左衛門、諸徳寺村又左衛門、桜井村左源司」とあり、名前の下にそれぞれの印が押されているが、良左衛門や又左衛

表5 改心楼普請金立替一覧

名前	居住村	金額(両)
伊兵衛	十日市場村	30
又左衛門	諸徳寺村	20
良左衛門	長部村	20
傳兵衛	米込村	10
金次郎	足川村	10
平太郎	岡飯田村	10
庄左衛門	野田村	5
茂兵衛	小見川村	5
啓一郎	鑄木村	5
合計		110

出典 「改心楼普請入用控」(嘉永3年 大原幽学記念館所蔵文書)

門は印鑑であるのに対して、左源司は爪印であることから、この両名よりも年齢的に若いのではないだろうか。またこの両文書に登場しない遠藤良左衛門は三五歳、幽学は四八歳である。想像以上に若い集団が中心となり性学の活動を展開しようとしていたことがわかる。

Cグループは、小前夜には参加できないが、中前夜を中心に大前夜にまで出席できる者がいたグループである。特に12から17までの正之進、文左衛門、吉兵衛、庄八、利助、空之進までは「中大前夜勝手次第」と文書に記載されている。大前夜、中前夜には参加自由ということであろう。その条件に当てはまる者たちは「定」には前述の五名、「改」には文左衛門と空之進の二名である。「勝手次第」と書かれたグループにはAグループの三名とCグループの中の五名がいることになる。また24の直吉は「定」では中前夜に属しているが、「改」では大前夜になっている。また17の空之進や30の幸蔵は「改」にだけ登場している。年齢がわかる者として吉兵衛が三二歳、庄八が二四歳、良蔵が二九歳など、総じてこの集団も若い。

ここでは11の佐重に注目したい。佐重とは、石毛佐左衛門のことである。享和二(一八〇二)年生まれ、明治四(一八七二)年六月二日、七〇歳で死去している。初めは佐重あるいは佐十といった。香取郡入野村

の百姓である。幽学へは人相神文を天保六(一八三五)年閏七月十八日、性学神文を天保六年八月十五日に入れている⁽⁵³⁾。中前夜、大前夜のそれぞれに筆頭として記されている。特に菅谷家文書の「改」の方には佐重の名前の上に〇印が記されている。多く存在するCとDのそれぞれのグループの、まとめ役といった存在であることを考えるとBグループ同様に重要人物である。年齢的にもメンバーの中では幽学について高く、四三歳であることもこうした役割を担ったのではないだろうか。

Dグループは、大前夜のみに出席できる者たちの集団である。一七名が登録されている。各村ごとに熱心な門人を参加させているようである。原史料では伊左衛門、源助、五助は対になっており、「定」では伊左衛門と源助のどちらか一名が、「改」の方では伊左衛門、源助、五助のうち一名が出席という意味でまとめて書かれている。ここでも入野村の佐重の名前があり、筆頭で「頭」の役を果たしている。このグループは各村よりの代表者といった観がある。性学組織の今後の展開を考える上で作られた組織集団と考えられる。

以上、幽学生前の前夜組織についてその構成員の分析をおこなった。小前夜、中前夜、大前夜と段階別に分かれてはいるが、これらは完全に村落共同体の枠組みを越えた組織であり、大原幽学の一方的な指導のもとに作られ運営されたものでもなく、むしろ遠藤良左衛門を中心とする長部村を拠点としたBグループの面々と他の門人の元締的な存在である「頭」の入野村の佐重を加えた幹部集団の門人たちによって組織されたものであることがわかる。彼らはその後の性学組織拡充に指導的役割を果たしていった者ばかりである。特にBグループの集団は経済的側面からも多大な援助をおこなっている。その中で特に血縁的な面でのつながりも強い。ある程度年齢や地域差と性学への貢献度によって、グループを分けて組織を形成し、円滑な運営を計ろうとした面もある。天保十五(一八四四)年当時の推定年齢を表4の補足事項に判断できる範囲で記

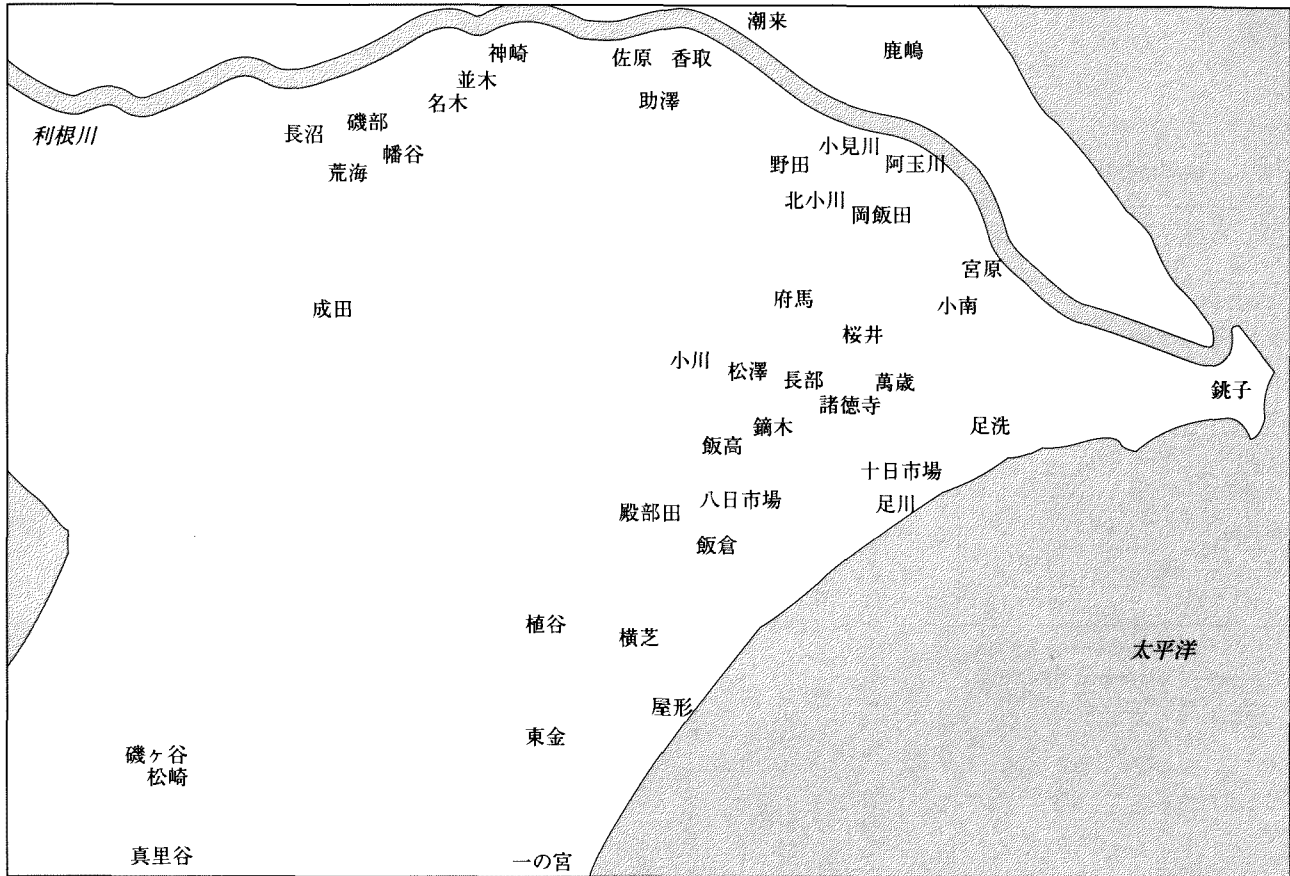


図2 東総地域における幽学滞在の村々

入したが、主観的ではあるが予想以上に若い集団であることも特徴である。そして、成員構成や成員数から考えると小前夜、中前夜、大前夜の順に重要度が高く位置づけられると考えられる。

表1の幽学の主要訪問先一覧から訪問した村々を地図に落としたものが図2である。これに対して表4の前夜組織構成員一覧から各前夜の成員の村々を地図に落としたものが図3である。図2と図3を比較して明らかのように、前夜組織の構成員の所在する村々は、東総地域の長部村や諸徳寺村を中心に利根川と太平洋に挟まれた狭い範囲に点在しているのが特徴である。幽学がこれまで東総地域を移動しながら作ってきた門人集団の居住村を示した図2とはあきらかにその居住範囲が異なっている。また荒海村や長沼村の主要門人は一人として前夜組織の運営メンバーには加わっていないことも大きな特徴である。その意味で、その後の性学運動の舵取りは長部村を中心とする主要門人によってなされたものと考えられる。

また、この前夜組織の成立時期に関して、まず「月々会合日記」という史料が存在することから、弘化二（一八四五）年の正月にはこの組織が運営されていたということは確実である。また、「前夜繰替改」が「辰」年であることから作成時期が天保十五（一八四四）年であることがわかる。⁽⁵⁵⁾

そして、菅谷家文書の『日記』⁽⁵⁶⁾に天保十三（一八四二）年のものがあり、最後の記述は天保十五（一八四四）年まで続いている。奥州旅行から始まっているもので、最後になるとかなり日付が飛ばされるが、「前夜」という言葉が登場してくる。初出は天保十三（一八四二）年九月十六日、次は、天保十四（一八四三）年三月二十七日とかなり時期が離れている。このことは、大前夜、中前夜、小前夜というような細かい分類を設けているような「前夜」と比較すると非常に対照的である。おそらく天保十五（一八四四）年になるまで前夜組織の重要な構成員の一人と

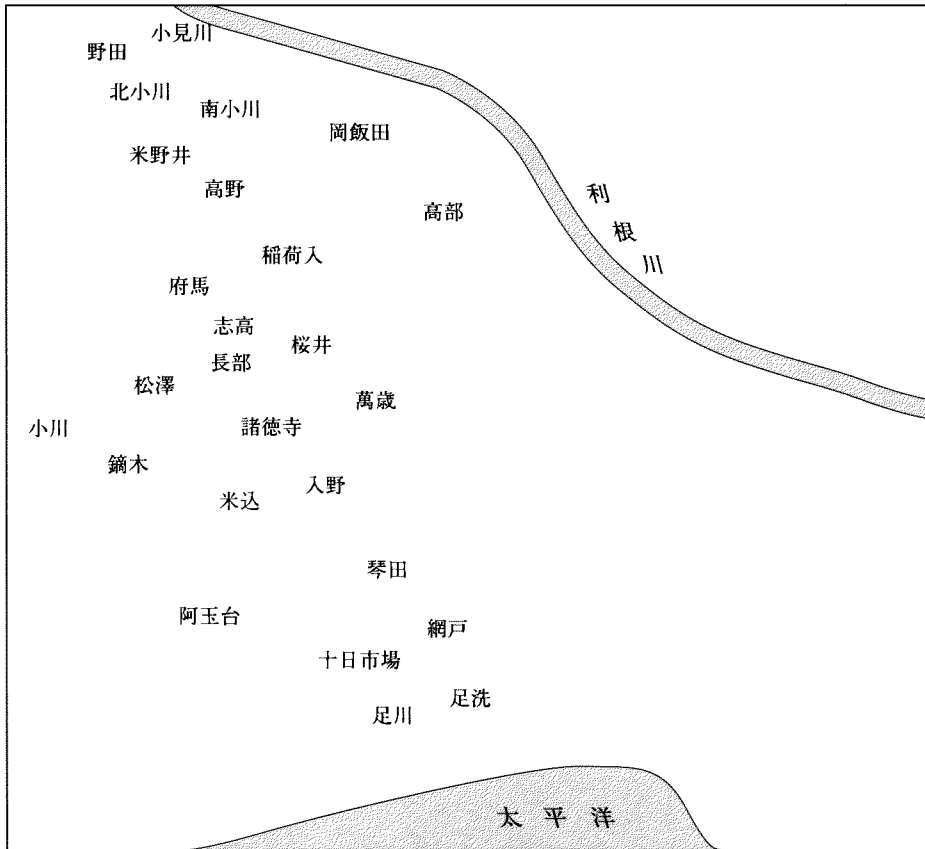


図3 幽学門人組織構成員の村々

なる菅谷又左衛門にとっても、この「前夜」はまだ重要な意味を持っていなかったものとも考えられる。以上の分析を踏まえ、天保十五（一八四四）年の後半にかけて「前夜」とよばれる組織が整備運営されるようになったと考えるのが妥当である。

③ 前夜組織の活動と幽学の行動

前夜組織についてその概要を知ることのできる史料に「月々會合日記」がある。弘化二（一八四五）年から嘉永二（一八四九）年までの幽学在世中の会合を記録したものである。前夜以外の会合についても実施年月日を含めて記されている。この中で幽学と性学組織の活動が最も盛んであった嘉永二（一八四九）年を取り上げたのが表6である。

この年は、後の「天保水滸伝」のもととなった勢力富五郎こと勢力佐助の捕縛騒動が起こるなど、東総地域一帯が騒然とした年でもあった。と同時に性学門人の新しい会合所である「改心楼」の建設に示されるように、性学が長部村を中心にその活動を最も活発にしていた時期でもある。

表6から一年間に五二回の会合をおこなっていることがわかる。小前夜、中前夜、大前夜以外にも男達と女供、そして惣前夜という会合がみえる。男達、女供については、その名の通り、男達は男性のみ、女供は女性のみということで出席者を限定した会合と考えられる。この男達、女供という会合は月の中頃に行われ、その前日に小前夜が開かれていることが多い。女供、男達の順である。小前夜ではおそらく男達と女供のそれぞれの会合の基本方針を決めていたものと考えられる。前夜という言葉の持つ意味は、「年中仕事割並日記⁵⁸」という史料の前文に、前夜に翌日の仕事の内容を確かめることを幽学が門人に教示した話が記載されており、事を決定する前夜の相談というほどの意味と考えられる。惣前夜については、一か月間に大前夜がある日には惣前夜が開かれていないことが特徴である。大前夜と同じか、それより規模の大きな会合と考えるのが妥当である。大前夜と書かずに惣前夜と書いてある以上、大前夜の成員と異なるメンバーが加わったと考えるべきであろう。他の年に

表6 嘉永二年における性学門人集団の月別会合一覧

月	1	2	3	4	閏4	5	6
日	30 18 17 13 12 11	29 23 17 16 15 12 10	25 24 23 20 18 10	29 16 10 6 5	29 17 10	20 18 17 16 15 10	6 3 2
会合	小前夜 女供 男達 惣前夜	小前夜 女供 男達 小前夜 中前夜	大前夜 小前夜 女供 男達	小前夜 大前夜 中前夜	大前夜 中前夜	小前夜 男達 女供 小前夜 大前夜	小前夜 惣前夜
付記事項	長沼村五郎兵衛、俊蔵、荒海村平右衛門之三兄年礼ニ来ル。	高松力蔵様御入来。	將軍様御鹿狩御定日にて會合日延。 大先生高松力蔵様御同道にて出府仕候。宜平同道。 荒海村平右衛門殿、長沼太左衛門殿来ル。	大先生、宜平、御帰宅。龍角寺七蔵、兄定次郎同道。	田植中ニ付會合休。尤かんばん以上參詣ニ来ル。	信州より任三郎、卯三郎御入来。 騒敷ニ付會合日延。	高松力蔵君越前国永平寺領ニ境論出来候ニ付罷越附添候。年頭より性学勸方被承尚又先祖株纏立之議定書並為取替罷遣度旨之出府罷申越候ニ付写遣候。

月	7	8	9	10	11	12
日	30 18 17 16 10	30 16 15 10	30 17 16 15 10	30 17 16 15 10	29 17 16 15 10	9 8
会合	大前夜 小前夜 男達 女供 中前夜	大前夜 中前夜	大前夜 中前夜	小前夜 女供 男達 中前夜	大前夜 小前夜 女供 男達 中前夜	小前夜 女供 男達
付記事項		女共會合之処大水にてあせり出候村出来候ニ付大先生より會合被為止候。右同断頭達し候者參詣ニ来ル。九ツ之引取。	所ニ檢見其他。差合有之ニ付。延日。	會合所土普請ニ付大前夜休。		會合所普請ニ付日々相談出来る故、中前夜改而不致候。

出典「月々會合日記」(大原幽学記念館所蔵文書)

行われている会合を「月々會合日記」からみてみると、「大中前夜」や「中大前夜」などの会合名が記されている日もある。そのことから惣前夜とは、ほぼこの「大中前夜」と同じ意味で使われているようである。つまり大前夜のみならず、小前夜、中前夜のすべての成員が出席する会合と考えられる。総じて、一か月間に大前夜もしくは惣前夜、小前夜、女供、男達、中前夜というローテーションで会合が行われるのが一つのパターンであり、こうしたパターンが弘化二(一八四五)年から整えられてきている。この点に関して「仕事割控」には、「性学日」という記載がある。「性学日」は年間四八日、月に四回という形で設定され、ほぼこれらの「性学日」は五日、十五日、十七日、二十八日になっていた。これには史料の記載に、ただ〇印が日程の日付に記されているだけのものであるが、この「仕事割控」と「月々會合日記」では、具体性を含めて大きな差があることは一目瞭然である。つまり、「仕事割控」の書かれた天保十二(一八四一)年から三年後には、会合を含めた組織に大きな質的变化があったことになる。

こうして農民間で作られた独自の組織集団が、組織として各集団を階層づけた上で、さらにそれぞれに成員が複合的に含まれることによって有機的につながり、さらに大きな組織集団の運営を行おうとしていた状況を確認することができる。

さらに「月々會合日記」には、延期の際はその理由を、また特別な参加者があつた時は、付記としてその事が記録されている。弘化二(一八四五)年からの日記の付記事項に着目していくといくつかの留意点が見つかる。

まず「先生」と書かれてあるのは大原幽学のことであるが、過去五年間の「月々會合日記」には、

尤会日先生留守⁽⁶¹⁾
尤当月先生留守⁽⁶²⁾
大先生留守にて休⁽⁶³⁾
先生留守にて大前夜休⁽⁶⁴⁾

という付記がついている日があり、それは幽学が普段は会合に参加しているもののまれに欠席することもあることを示している。欠席の場合は休会の場合もあったが、ほとんどは幽学抜きで会合は実施されているのである。このことについて、幽学の信州への行動記録をまとめた表7と照合すると、会合に出席していない日には、幽学は信州に赴いていることがわかる。

幽学は、天保十三(一八四二)年に長部村に居宅を構えてからも、一年に一回から二回、信州に出かけている。例えば、弘化二(一八四五)年は三月から二か月間にわたり信州小諸や上田の門人宅を訪問している。表7より嘉永二(一八四九)年までに毎年一か月から二か月の長期にわたり信州へ出向していることが判明する。幽学は長部村を拠点としながらも信州に別の組織集団が存在しており、そこにも活動拠点があつたと考えられる。また表6から信州より任三郎と卯三郎の二名の門人の長部村への来訪が記録されていることがわかる。幽学は東総地域よりも早い時期に性学を信州の地ではじめ、やがて藩当局の圧迫から性学継続が困難となり信州を離れたものの、実際にはその後も信州における門人組織は幽学と結びついており、そのことが年間一か月にも及ぶ信州訪問にあらわれている。その意味では、幽学が信州の門人と東総地域の門人とのネットワークを作っていたとも言える⁽⁶⁵⁾。

また「月々會合日記」には、長沼村や荒海村からの門人の来訪が記録されている。一月十一日には、長沼村の五郎兵衛や荒

表7 幽学の信州への行動記録

年	月	記録内容
弘化2年	3	長部村をたち、信州小諸、上田に赴き、5月帰村。
	8	再び信州に赴き、9月に帰村。
弘化3年	2	幽学、信州に赴き、上田・小諸の門人を伴って越後高田および諏訪を旅行。
弘化4年	3	幽学、小諸・上田に赴き、5月に帰村。
嘉永元年	4	4月3日、幽学、信州に来る。21日に下総に向け出立。
	7	そのうち6日間は、上田の菱屋に向向く。 信州に赴き、小諸に先祖株組合を結成。
嘉永2年	4	16日、信州より任三郎、卯三郎御入来。

出典 「信陽道の記」(幽学記念館蔵)、「月々會合日記」(大原幽学記念館所蔵文書)

海村の平右衛門が年始の挨拶にきている。長部村からおおよそ北西に約30km程の距離があるこの地域一帯は、長沼村の本多元俊や荒海村の糸川平右衛門などが中心となつて、性学活動が展開されており、長部村を中心とする前夜組織と強いつながりがあつたことを示している。

次に「高松力蔵」という人物についての記載がある。高松家と幽学の関係については、松澤和彦氏の有益な研究がある。⁽⁶⁶⁾この力蔵は、幽学の江戸訴訟の際に身元保証人の役割を果たした高松彦七郎の次男である。この江戸訴訟に高松家は一家の進退をかけて幽学を擁護することになつたが、表6から嘉永二(一八四九)年三月には、幽学は力蔵とともに江戸へ出向していることがわかる。また六月には力蔵が越前国の永平寺領

の「境論」のために出かける際にも長部村に立ち寄っている。こうした記録は、本来は高松彦七郎やその長男である高松彦三郎が、幽学検査後の江戸訴訟において活躍する人物であることを考える時、すでに嘉永二(一八四九)年には高松家は家族ぐるみで性学組織と結びついていたという⁽⁶⁷⁾ことを物語っている。

補足すると、嘉永二(一八四九)年四月十六日「騒敷二付会合日延」⁽⁶⁸⁾については、四月二十八日に勢力富五郎が自殺していることからこの事件との関連が考えられる。また十月に「会合所」とあるのは「改心楼」建設のことと考えられる。この年の後半には「改心楼」建設のために「前夜」の活動を休止している。

おわりに

幽学は天保二(一八三一)年に房総地方の地に足を踏み入れた段階では、性学の指導者として活動を開始したのではなかった。幽学が残した神文の内容から、あるいは他の幽学関係史料などから、易、人相見、あるいは和歌詠みなどの手段で、村々の文化人、富裕な上層農民に一宿を求めながら漂泊していたと考えられる。

天保四(一八三三)年から房総地方の北西部である東総地域と北部へ行動範囲を広げて、天保五(一八三四)年以降、この地域で性学を中心として活動を展開した。というより性学がこの地で受け入れられたことがきっかけで、性学で糊口を凌ぐことを始めたと言った方が適切であろう。それは、神文の発行が天保五(一八三四)年に急増し、天保九(一八三八)年にピークを迎えていることからわかる。この中で、性学を積極的に受け入れた者が、特に長部の遠藤良左衛門、諸徳寺の菅谷又左衛門を中心とする門人集団である。そして、彼らが幽学を押し立てながら作り上げた組織が「前夜」であった。この組織は、その後も門人の年

年齢や性学への貢献度などを加味して、小前夜、中前夜、大前夜、男達、女供などの各集団に細かく組織化されることとなった。さらに牛渡村一件から幽学の江戸訴訟において、この前夜組織の主要構成員が大きく関与していることは興味深い。

前夜組織の中では、集まった者同士が、自己の行動規範や性格改善のために何をすべきかについて語り合っている。⁽⁶⁹⁾ 小前夜、中前夜など各前夜ごとに討議されていた内容を藤田昭造氏は分析されているが、ここでは討議内容より、各組織ごとに集まる成員を限定し、門人間が階層化されていく組織過程を重要視したい。会合内容そのものは、幽学の主要著作である「微味幽学考」⁽⁷¹⁾に叙述された内容の域を出るものではない。この「微味幽学考」について、中井信彦氏は次のように述べている。

幽学の言説の場は常に農民の現実の生活そのものであった。生活と関わることのない抽象の世界を扱うことをしなかった。⁽⁷²⁾

幽学は、東総地域の農民に、俗耳に入りやすい形で繰り返し、一歩ずつ現実を踏み広げるための方法を説いてきた。そのものが、門人集団の討議にあらわれていたと考えることはできないだろうか。「義論集」⁽⁷³⁾というものがあるが、これは幽学と門人による師弟の問答録でもなければ師の言行録でもなく、門人達がおこなった学習会の記録である。中井氏も義論集は「共同学習の記録にはかならない。」⁽⁷⁴⁾と述べているが、この実践の場が「前夜」を始めとする会合であったと考えられる。

さらにこれらの精神修養的な実践とともに遠藤良左衛門、菅谷又左衛門、幸左衛門兄弟を始めとする「前夜」集団が一丸となって取り組んだものが、性学の会合所である「改心楼」の建設であった。「前夜」組織のモニュメント——記念碑——としての「改心楼」を幽学と性学組織の活動の中に位置づける必要がある。

註

- (1) 尾張藩家老大道寺家の出身であると言われるが、その証拠はない。切腹による自殺であったことなど武士らしい振る舞いが随所に見受けられることから牟人大原幽学の呼称もされるが、しかし確実に武士であったという根拠は見つかっていない。これ以降、幽学と本稿では呼称したい。
- (2) 大原幽学記念館所蔵文書。『大原幽学全集』にも掲載。(三〇二―四三三頁)
- (3) 幽学とその門人との関係を示すものに「神文」という入門状があり、幽学生前の入門状は六〇〇通以上残っている。『旭市史』第三卷「大原幽学関係史料」参照。
- (4) 川名登「神文」よりみたる幽学門人層(『旭市史』第三卷 一九七五年)
- (5) 幽学に関する先行研究については枚挙に遑なしであるが、史料集も含めて骨子を成すものを年代順に挙げれば、田尻稻次郎「大原幽学全書」(一九一一年)、千葉県内務部編「大原幽学」(一九一二年)、千葉県教育会編「大原幽学全集」(一九四三年)、戦後に入り越川春樹「大原幽学研究」(理想社 一九五七年)、中井信彦 人物叢書「大原幽学」(吉川弘文館 一九六三年)、奈良本辰也・中井信彦 日本思想体系五二「二宮尊徳・大原幽学」(岩波書店 一九七三年)、木村礎編「大原幽学とその周辺」(八木書店 一九八一年)などがある。
- (6) 戸沢行夫「大原幽学の教導仕法について」(『史学』四八―二、大槻宏樹「社会教育運動とその機能 大原幽学の性理学を中心として」など。
- (7) 堀江俊次「幽学死後の組織的展開」(『旭市史』第三卷 一九七五年)
- (8) 藤田昭造「性学運動の展開と前夜組織」(『歴史論』八号 一九八七年)、「大原幽学の教化活動と性学組織」(『駿台史学』九〇号 一九九四年)
- (9) 幽学の出自については、木村礎「大原幽学の出自について」(前掲、木村礎編「大原幽学とその周辺」、水谷盛光「大原幽学出自考」(『日本歴史』三二二号 一九七五年)
- (10) 「口まめ草」(大原幽学記念館所蔵文書) (『大原幽学全集』では三六二―三六三頁)
- (11) 百子村は、百首村と考えられ、竹ヶ岡村のことと思われる。
- (12) 『大原幽学全集』(一九四三年 千葉県教育会)
- (13) 松澤和彦「大原幽学日記(全集本)の検討」特に「道の記」、「性学日記」、「口まめ草」について(『駿台史学』四一号 一九七七年)
- (14) 前掲、松澤論文参照。松澤氏は『大原幽学全集』の「道の記」の天保四年六月六日と七月二十七日の間の記述に季節のそぐわないものが多く錯簡であろうと指摘されている。

- (15) 天保二年～三年については、「口まめ草」の記述を使用した。
- (16) 佐原については、日記の記述では幽学はほとんど宿屋に宿泊している。
- (17) この神文を分析した論考に川名登「神文」よりみたる幽学門人層（旭市史）第三卷 一九七五年）、川名登「大原幽学門人層の社会的性格について」（日本歴史）三三五号 一九七六年）がある。
- (18) 「連中誓約の事」（大原幽学記念館所蔵文書）
- (19) 前掲「大原幽学全集」三四～三九頁。
- (20) 高木彦兵衛については、高部淑子「近世後期～明治初年の小見川周辺と性学——高木平兵衛を中心として——」（千葉県史研究）二号 一九九四年）を参照。
- (21) 長沼村の性学門人については、大野政治「成田市域における大原幽学の研究」（一九五七年）を参照。
- (22) 椎名琺藏については、「大原幽学門人椎名琺藏と性学飯倉組」（『史潮』新二〇号 一九八六年）を参照。
- (23) 「大原幽学全集」の「連中誓約の事」の解説には、「後事を託して訣別し、翌日上方に出発したので、道友は深く、これを悲しみ、……（後略）……」とある。
- (24) 「口まめ草」（大原幽学記念館所蔵文書）
- (25) 前掲、「口まめ草」には、「二十三日長部村着、子孫永統の取り極め」とある。
- (26) 前掲、「口まめ草」には「長部村に來れば、良左衛門、源藏の二人のぬし始め五六輩にて、僕が住み家として、僕が住家として草庵を結び給えり。九月十八日よりこの草庵を僕が住み家として、ここに諸人に教えをなさぬ。」とある。なお木村礎氏は天保十三年九月に作られた家屋は「草庵」と呼ばれるもので、天保十四年五月に新しい居宅が作られたことを指摘している。（木村礎編「大原幽学とその周辺」三五～三七頁）
- (27) 「定」（年次不詳、遠藤家文書）
- (28) 「前夜繰替改」（辰六月十六日とあり、菅谷家文書、以降「改」と記す。）
- (29) 木村礎「幽学研究余滴」（『日本歴史』一九八六年 四五二号）
- (30) 菅野則子「大原幽学にみる「家」と女性・子供」近世女性史研究会編「江戸時代の女性たち」（吉川弘文館 一九九〇年）など。
- (31) 木村礎氏は、大原幽学の独特の仕法というべき先祖株組合も、遠藤良左衛門と大原幽学の合作ではないかとの注目すべき指摘をされている。（前掲、「大原幽学とその周辺」一五一頁）
- (32) 小笠原長和「東総農村と大原幽学」（千葉大学文学部「文化科学紀要」第一集 一九六三年）、木村礎編「旧高田領取調帳 関東編」（近藤出版社 一九八〇年）などを参照。
- (33) 門人ひとりひとりの正確な把握については今後の課題である。なお幽学関係史料は、幽学自身ばかりでなく、むしろ無名の普通の農民の顔が出てくる、それも多人数であるという点で、これは極めて珍しいものではないだろうか。
- (34) 「幽学一件に勤めた者の名簿」（明治元年 大原幽学記念館所蔵文書）
- (35) 前掲、「大原幽学とその周辺」二三〇頁
- (36) 「景物集」（安政三年 大原幽学記念館所蔵文書）
- (37) 「神文之事」（安政七年十一月 大原幽学記念館所蔵文書）
- (38) 「仕事割控」（天保十二年 遠藤家文書）
- (39) 「高反別根取帳写」（嘉永四年 大原幽学記念館所蔵文書、「高反別名寄帳」（嘉永四年 大原幽学記念館所蔵文書）
- (40) 「差入申一札之事」（天保十四年 林家文書）
- (41) 「神文之事」（天保九年九月十九日 大原幽学記念館所蔵文書）
- (42) 前掲、「幽学死後の組織的展開」（『旭市史』第三卷）七二頁
- (43) 前掲、「大原幽学とその周辺」一三四頁
- (44) 前掲、「大原幽学とその周辺」一三五頁
- (45) 「神文之事」（弘化三年十二月十五日 大原幽学記念館所蔵文書）
- (46) 「元服人名録」（天保十四年 大原幽学記念館所蔵文書）
- (47) 「神文之事」（弘化三年十二月十五日 大原幽学記念館所蔵文書）
- (48) 「幽学門人名前取調帳」（嘉永五年 遠藤家文書）
- (49) 「神文より見たる幽学門人層」（『旭市史』第三卷）七二三頁、「門人群像」（前掲、「大原幽学とその周辺」二四〇頁）
- (50) 牛渡村一件については、高橋敏「大原幽学と改心楼乱入事件——牛渡村一件の真相——」（田中彰「幕末維新の社会と思想」一九九九年）が詳しい。
- (51) 「改心楼普請入用控」（嘉永三年六月 遠藤家文書）
- (52) 「差入申一札之事」（天保十四年 林家文書）
- (53) 「神文之事」（天保六年七月十八日 大原幽学記念館所蔵文書、「神文之事」（天保六年八月十五日 大原幽学記念館所蔵文書）
- (54) 「月々會合日記」（大原幽学記念館所蔵文書）
- (55) 天保十五年は十二月に弘化と改元している。
- (56) 「日記」（天保十三年 菅谷家文書）
- (57) 前掲、「月々會合日記」
- (58) 「年中仕事割並日記控」（嘉永五年 大原幽学記念館所蔵文書）
- (59) 「天中小前夜」は弘化二年正月十六日、「中大前夜」は弘化二年九月十六日にその記述がみられる。
- (60) 前掲、「仕事割控」（天保十二年 大原幽学記念館所蔵文書）
- (61) 「月々會合日記」（弘化二年五月二十九日）

- (62) 「月々會合日記」(弘化二年八月)
- (63) 「月々會合日記」(弘化五年五月三十日)
- (64) 「月々會合日記」(弘化五年六月)
- (65) 信州における幽学の行動については、前掲、中井信彦「大原幽学」三八〜五五頁、横山十四男・青木歳幸「活動の開始―信州上田・小諸の門人たち」(木村礎編『大原幽学とその周辺』五七〜七五頁を参照。また近年、新たに見つかった幽学と上田・小諸の門人との関わりを示す史料が齊藤洋一氏より「大原幽学と上田・小諸町との関わりを示す史料」(『史料館紀要』第8号〈学習院大学 一九九五年〉)として報告されている。
- (66) 松澤和彦「高松家と大原幽学」(『歴史論』八号 一九八七年)、また「ひかたの歴史と民俗」第4号特集「高松家と大原幽学」(大原幽学記念館・干潟町歴史民俗研究会 二〇〇二年)で木村礎氏は松澤氏の遺稿を踏まえて高松家と長部村の関係を総括している。
- (67) 幽学の江戸訴訟については、高橋敏「大原幽学と江戸訴訟」(『歴史学研究』七一七号 一九九八年)が詳しい。
- (68) 「月々會合日記」(嘉永二年四月十六日)
- (69) 「日記」(嘉永二年 菅谷家文書)など。
- (70) 前掲、藤田昭造「大原幽学の教化活動と性学組織」を参照。
- (71) 「微味幽学考」(年次不祥 大原幽学記念館所蔵文書)
- (72) 中井信彦「微味幽学考」と大原幽学の思想」(日本思想体系 三「宮尊徳・大原幽学」(岩波書店 一九七三年) 四八一頁)
- (73) 「義論集」(年次不祥 大原幽学記念館所蔵文書)
- (74) 前掲、中井信彦「微味幽学考」と大原幽学の思想」四八三頁

(千葉県史料研究財団、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了)

OHARA Yugaku and Groups of Sei-gaku Disciples: the Formation and Development of the Zen'ya Organization

MATSUMARU Akihiro

OHARA Yugaku was an advocate for the movement for agrarian reform through the practice of moral education and through economic and technical practices such as the *Senzo-kabu Kumiai*, and was active in the Toso region during the latter part of the Early Modern Period. These practices referred to as Yugaku's "Sei-gaku" were practices that generated excellent results and were rated highly among peasants, thus earning him a great many disciples. However, this success attracted the suspicion of the Bakufu authority, and, beginning with the Ushiwata Village Incident, the court case against Yugaku lasted six long years, culminating in his suicide in 1858. This paper throws new light on Yugaku and his groups of disciples beginning from the time when Yugaku was an itinerant earning his daily food by telling fortunes and through reciting *waka* poems, through to the rise of Yugaku's Sei-gaku in the Toso region, particularly in Nagabe village, and the construction of Kaishinro, his educational center, and also investigates the organizations created by Yugaku and his disciples. It is not conceivable that Yugaku's Sei-gaku managed to obtain more than 600 disciples over the course of a few years in the early 1840s as a result of the individual activities of Yugaku alone. Further, there is also a problem in methodology employed in works written on Yugaku where in the process of honoring the man all of the practices are attributed to Yugaku. It is important that we turn our attention to organizations, of which the Zen'ya is a representative example, which were created mainly owing to the existence of high-ranking disciples such as ENDO Ryozaemon of Nagabe village and SUGAYA Matazaemon of Shotokuji village who were largely responsible for these organizations. It was the peasants themselves who formed the organizations that pursued vigorous activities and were linked by means outside the framework of an authoritarian mechanism during the time that Yugaku was engaged in activities across the Toso region. This paper also sheds light on the specific nature of these organizations. These organizations supported Yugaku's activities and resulted in the construction of Kaishinro, his educational center. In the respect that they are closely related to events that occurred from the construction of Kaishinro up to the Ushiwata Village Incident, they are significant when considering Yugaku's Sei-gaku activities. I also expose the relationships of these organizations with the Narita district disciple group, the Ueda and Komoro disciple groups in Shinshu (in present-day Nagano prefecture) and also with the Takamatsu family, which appears at the prosecution of Yugaku in Edo.
